

## 「2015年シドニー大学スプリングスクールプログラム参加報告書」

京都大学総合人間学部2年 井上翔太

## ① 学習成果

今回のプログラムのうち、平日の大学における講義は主に英語に関する広範な知識を供するものであった。それは英語の語法や発音だけでなく、オーストラリアの歴史や文化にもかかわるものであり、ひとくちに「英語」といっても国や地域ごとの差は歴然と存在することを再認識でき、より言語学への興味が深まった。

また今夏より開始予定のイギリスへの長期派遣留学のための下準備として、文化差からくる振る舞いの形や受け取り方の違いについての講義を受けることができた。

なにより大きかったものは④でも述べる国際交流基金訪問である。日本と異文化の橋渡しをするこの団体の活動は自分の興味関心の自覚を促した。日本文化を他国に理解してもらうための活動やそれに付随する現地スタッフとの協力、及び相手国の文化への理解・関心の推進を行う活動は非常に興味深いものであった。

また今回の留学において、大学内外での学習だけでなく、他の参加者との寮での共同生活も私に大きな影響をもたらしたように思う。毎日ほぼ常に複数人の参加者と行動し、話をする中で、文化や将来のビジョンなどに関して自分の抱いた感想や意見を即座に彼らと交換することができ、様々な考え方の形を知った。二週間のプログラムだが、共同生活の密度の高さのおかげで相互に深く相手を知ることができた。

## ② 海外での経験

私にとって今回の留学は英語母語圏への二度目の訪問になる。一度目は高校生の時分であったが、今回大学生として改めて訪れた英語圏は、高校生の時と大きく変わって見えた。

平日の講義後や週末はシドニーの市街地を訪れることが多かったが、その際に多く見かけたのは白人だけでなくインド系、中国系の人々であった。多様な人々が主に英語を共通語として使用して調和のうちに暮らす様子は、一つの文化交流の形であるだろう。

この光景は大学内においても同様であり、様々な文化的背景を持つ人々が机を並べて講義を受ける姿を実際に直接見ることができた。加えて農場や海など、オーストラリアの特徴的な場所を実際に研修という形で訪れ、直に現地の方々から話を伺うことができたのはよい経験となった。このように学術面のみならず文化的側面においても得るものが多々あったと言える。

## ③ プログラム内容

プログラム全体として思っていたよりも英語を使用する機会は多くなかったものの、日本の国際交流基金の訪問など、日豪間のつながりを間近に見られたことが私にとって最も価値のあるものであった。そういった機会を盛り込んだこのプログラムの内容は私にとって満足のいくものであったと言える。

## ④ 進路への影響

大学内の講義の一環として、日本とオーストラリアをつなぐような仕事や機関の存在について学ぶことができ、そういったものに強く惹かれる自分を自覚できたように思う。

特に国際交流基金への訪問で、職員の方から具体的な仕事を説明していただけたため、自分のやりたい仕事、かかわりたい分野が見えてきた。将来的には日本文化の紹介や、異文化との相互理解の促進に貢献できるような職に就きたいと思うようになった。